

2018 年度(平成30年度)学校評価自己評価表

向丘 中学校区	校番 8	福山市立向丘中学校
最終更新日 2019年(平成31年)2月20日		

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
 ビジョン 「福山100EN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型「スキル&倫理観」」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

- ・校区共通の指標を設定し、実態や成果課題を整理しており、校区の取組が良く分かっていった。
- ・小集団学習等により、自分の考えを深めたり広げたりできている。
- ・教職員研修や地域とのかかわりは概ね良好である。

児童生徒の現状

- ・各教科における表現力が十分に三についていない。
- ・自ら行動しようとする事や粘り強く取り組む事が苦手な児童生徒が多い。
- ・自己肯定感や自己有用感が低い児童生徒が多い。

育成する力
(21世紀型「スキル&倫理観」)めざす子ども像
(義務教育修了時の姿)中学校区として
統一した取組等

表現力、課題発見・解決力、情報活用能力、主体性、協調性・柔軟性、自己理解、郷土愛

人とのかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、自分の生き方を主体的に考える子どもも

○校区の学力課題を分析し、自ら考え学ぶ授業づくりを推進する。

○生活態度、規範意識について共通的・系統的な取組を推進する。

○特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを推進する。

III 自校

ミッション

自校や郷土に愛着と誇りを持ち、他者とのかかわり合いを大切にし、自分の生き方を主体的に考え、粘り強く実践する生徒の育成する。

学校教育目標

『自ら気づき、考え、創造し、実践する生徒の育成』

校訓 【自律創生】

現 状

<生徒>

○学年や教科によって学力の定着状況にばらつきが見られる。また、思考力・判断力・表現力を問う活用力にやや課題がある。

○話し合い活動による学びの深まりや広がりが見られつつある。

○学校や学級への貢献意識が低く、自己有用感が十分に高まっていない。

○挨拶・時間を守る・無言清掃の取組については、生徒の意識に温度差が見られ、主体的な活動への高まりにやや欠けている。

<授業>

○課題発見・解決学習に取り組み、思考の「すべ」を意識させ、協働的な学びによる生徒の主体的な学習活動を仕組む授業づくりを推進した。

○めあて、授業の流れ、振り返りを明示し、生徒が集中して積極的に授業に取り組むことができるよう授業改善に取り組んだ。

育成する力
(21世紀型「スキル&倫理観」)

主体性

自己理解

課題発見・解決力

めざす
子ども像1
年

より高い目標を立て、よりよい解決に向けて取り組んでいる。

自分の長所や短所を理解し、自己の生き方を考えている。

物事を多面的に見たり、考えたりして課題を設定し追及している。

2
年

より高い目標を立て、よりよい解決に向け粘り強く取り組んでいる。

自らの学びの有り様を理解し、よりよい生き方について考えている。

多様な視点を持って課題を設定し、様々な方法で追及している。

3
年

より高い目標を立て、他者と協働してよりよい解決に向け粘り強く取り組んでいる。

自らの学びや表現の有り様を理解し、よりよい生き方について考え実行している。

多様な視点を持って物事を見つめ、課題を見つめ、様々な方法で追及し課題解決している。

研究

めざす授業の姿

教科等

特別活動

主題・
内容等

課題発見・解決力、主体性、自己理解の育成
～「すべ」を活用し自ら学び合う授業づくりを通して～

○単元を通して、生徒自ら課題を見つけ粘り強く探究する授業

○思考の「すべ」(比較、関連付け、分類等)を活用し、他者との協働的な学び合いの中で、自分の考えを整理したり、深めたりすることができる授業

○授業の終わりや単元の終末において、学習を振り返り、自分の成長を感じることができる授業

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立 向丘中学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	加セ 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	加セ 評価	達成 評価		
2	探究する楽しさ、わかる喜びを知る授業づくりを推進し、「課題発見・解決力」、「主体性」、「自己理解」を育成する	継 続	生徒に基礎的、 基本的な学力及び 活用的、探究的な 学力を身につけさ せる。	基礎の確認の ための小テスト を実施する。 定期テストに おいて学力調査 の類題や思考力、 表現力を問う問 題を出題する。	標準学力テスト において、全学年、 全教科で全国平均 を上回る	全国学力テス トにおいて平均 正答率が、国語 A 74%, 国語 B 59%, 数学 A 62%, 数学 B 43%, 理科 63%であった。全 教科で全国平均 を下回った。	3	2	学力調査の分 析から捉えた課 題を踏まえ、情報 を正しく読み取 ったり、整理した り、必要な情報を 取り出す活動を 意図的に仕組む。	中間評価より授業 に工夫を感じている 生徒は 92%で増加 した。また、落ち着 いて授業に取り組む 意識が高まった。 ◎評価指標の達成率 は 34%であった。	3	2	2	話すこと・書く ことを通して、既 習事項や日常経 験、他者の意見を もとに自分の考 えを組み立て、表 現する取組を充 実させる。	
							★	継 続	カリキュラ ム・マップにおけ る重点単元にお いて、課題発見・ 解決学習に取り 組み、授業力の向 上を図る。	思考のすべ(比 較、関連付け、分 類等)を活用し、 協働的な学び合 いの場を作る。 自分の成長を 感じさせるため に、導入や振り返 りを工夫する。	生徒アンケート 「自分の考えと他 人の考えを比較し ながら聞いている」 「話し合い活動を 通じて、自分の考 えを深めたり広げた りすることができ ている」の肯定的回 答90%以上	単元の中で話し 合いの場を位置づ け、お互いの考 えを交流する活動を行 った。 生徒アンケート は、いずれも肯定 的回答が 81%であ り、目標をやや下 回った。	4	3	生徒の疑問や 呟きを拾い、主体 的な学び合いと なるよう協働学 習の工夫改善を 図る。また、振り 返りの工夫によ り、考える楽しさ や自分の成長を 実感させる。
2	自ら創る樂 しさ、友と伸 び合う喜びを 知る活動づくりの推進し、 「自己肯定感」、「自己有用感」の高揚 を図る。	★	見 直 し	生徒の主体性 を引き出し、自ら の思いを発信する 表現活動を推 進する。	学級集団づ くりを基盤に、学年 や縦割り集団づ くりを行う。 集団のあるべき姿を生徒に持 たせるように指 導し、フォロワー (協力者)の役割 を生徒に意識さ せる。	生徒アンケート 「学級や学校の中 で自分の力が役に 立った」と感じる生 徒80%以上	生徒アンケート では、肯定的 回答が約 60%で あった。 自分の役割を 意識して主体的 に取り組む姿が 見られ、学級活 動への貢献に係 る肯定的回 答は 8割を超 えた。	4	3	行事の取組が 日々の取組に繋 がることを意識 させ、生徒会執行 部や各種委員の主 体的な取組をサ ポートし、達成可 能性を評価する。	学級活動への貢 献意識や生徒会ス ローガンへの取組 意識が中間評価よ り 4 ポイント上昇 した。生徒会役員 選挙への意識が高 まった。 ◎評価指標の肯定 的回答は約 60%で あった。	4	3	4	行事や全校集 会等で、先輩の姿 から学んだこと が、日々の学級活 動で実践できる よう、短学活や生 徒会委員会の充 実と活性化を図 る。
		見 直 し	生徒の成長や 努力を褒めて伸 ばす取組を推進 する。	各学年、各教科 等の取組を掲示 したり、交流した りすることで、自 分の成長を振り 返らせる。	生徒アンケート 「自分には良いと ころがある」「自 分の良さは周りから 認められている」肯 定的回答80%以上	3	2	全教職員で 個々の生徒の良 さや頑張りを連 携・交流し、肯 定的な評価を 様々な場面で行 う。	生徒の肯定的な 評価を様々な場 面で行った。 ◎評価指標の「自 分には良いと ころがある」71%, 「自 分の良さは周りから 認められて いる」62%で中間評価 より向上した。	4	4	4	生徒の意欲を 受け止め、主体性 を引き出した活 動を奨励し、頑張 りや成長を認め る取組を引き続 き行う。		

2	落ち着いた学習環境づくりの推進し、生徒の学びを支え、人間関係形成能力の育成を図る。	継続	特別支援教育の視点を取り入れたユニバーサル・デザインの授業づくりを行う。	3分前行動、1分前着席に取り組み集中して授業を開始する。 1時間の授業の流れを生徒に示し、授業に見通しを持たせる。	生徒アンケート「落ち着いて(集中して、積極的に、真面目に)授業に取り組んでいる学級」の肯定的評価70%以上	教員や生徒の授業前の声掛けにより、1分前着席は97%であった。 生徒アンケートの肯定的評価は65%であった。	4	4	授業の始まりから、授業の導入を意識し、生徒の意欲を高めるとともに、授業の流れを示し、授業に見通しを持たせる。	授業の流れを示してくれていると感じる生徒が90%と見通しを持たせることができた。 ◎評価指標の肯定的評価は70%であった。	4	4	4	校区の児童生徒支援プロジェクトと連動させ、生徒の困り感を減らすための指導の工夫改善を行う。
		見直し	他者とのかかわりを大切にさせ、いじめ・不登校の早期発見と早期対応を図る。	校内ボランティアや地域ボランティアへの参加を奨励する。 学期始めの教育相談の充実を図る。	生徒アンケート「人が困っているときは、進んで助けている」の肯定的回答93% 長期欠席者(30日以上)を前年度比3割減	学級活動への貢献や助け合いを意識している生徒は約8割であった。 生徒アンケートの肯定的回答は87%であった。長期欠席者は昨年の同月比(9月末)で同数であった。	4	4	引き続き、教員からの声掛けや生徒からの相談により、教育相談を充実させ、他者とのより良いかかわり方について考えさせる。	先生が相談にのってくれると感じる生徒が中間評価より7%上昇した。 ◎評価指標の肯定的回答は86%であった。また、長期欠席者は昨年の同月比(1月末)で、2.5割減であった。	4	4	4	生徒の活動を丁寧に見守り、状況に応じた声掛けを行うとともに、他者との良い関わり方を考えさせる。また、集団としての成長を積極的に評価する。
		新規	自分と地域との関わりについて考え、自分の生き方を主体的に考える。	総合的な学習の時間等において、地域の人材や施設を活用した取組を推進する。 地域の行事やボランティア活動への参加を奨励する。	生徒アンケート「自分の住んでいる地域が好きです。」の肯定的回答85%	約5割の生徒が地域行事等への参加をしている。 生徒アンケートの肯定的回答は84%であった。	4	4	地域行事や学校周辺を含む美化活動への参加を働きかける。 地域の人材や施設を活用した取組を推進する。	職業講座、職場体験や修学旅行の民泊が住んでいる地域の良さを考える機会となった。 ◎評価指標の肯定的回答は84%であった。	4	4	4	地域の人材や施設を活用したキャリア教育を推進する。生徒会活動や部活動を地域行事

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかつた。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかつた。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多くなった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかつた。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準
5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかつた。
1	40%未満の達成度 目標を達成できなかつた。